

有標的な中国語の習慣相に関する一考察 —日本語との対照を兼ねて—¹

A comparative study of marked Habitual in Chinese and Japanese

劉 琛琛

LIU Chenchen

1. はじめに

外国人が中国語を習う時、いつも次のような例文に現れてくる“会”、“要”、“爱”の意味と使い方に疑問を抱く。

- (1) 父亲每次来看女儿都会给她买喜欢的玩具。

父が毎回娘を会いに来たとき、いつも好きなおもちゃを買ってあげる。

- (2) 他几乎每天都要给女朋友打一个小时的电话。

彼がほとんど毎日のようにガールフレンドに一時間も電話をかける。

- (3) 我总是爱犯这样的毛病。

私がいつもこのような間違いをする。

この“会”、“要”、“爱”について、呂淑湘（1980）では次のように説明している。

“会”は動詞と助動詞との働きを持ち、動詞の働きをする場合には「習熟する、精通する」の意味を表すのに対し、助動詞の働きをする場合には、「①何かをする能力を持つ、②～を得意とする、～を上手にする、③可能性がある」など意味を表す。“要”は動詞の働きをする場合には、「①要る、②求める、③頼む、要求する、④必要とする」など意味を持ち、助動詞の働きをする場合には、「①～しようとする、②～しなければならない、③～かもしれない、④まもなく～する、⑤推定する」など意味を表すほか、接続詞の働きもし、仮定を表したり「これでなければあれである」という意味を表したりする。“爱”は動詞であり、「①愛する、②好む、③どうでもいい（不満を言う場合）、④大切にする、重んじる、⑤よく～する、～しやすい」など意味を表す。

呂の説明では以上の例文（1）～（3）に現れている“会”と“要”に当たるものが見つ

¹ 本論文は2012年度中国浙江省社会科学界連合会プロジェクト研究『中（普、粵）日语“惯常体”の対比研究』と2011年度中国浙江省言語文字委員会プロジェクト研究『中日语言“惯常体”の対比研究』との研究成果の一つであり、それぞれ2012N168とZY2011C08である。（本論文为中国浙江省社会科学界联合会2012年研究课题“中（普、粵）日语“惯常体”的对比研究”和浙江省语言文字工作委员会科研项目“中日语言“惯常体”的对比研究”的成果之一，项目号分别为2012N168和ZY2011C08）

からず、“愛”に当たるものは⑤のようである。柯理思(2007)では“会”、“要”、“愛”がある人物がある時期における特有の動作や状態を指す「習慣相(Habituals)」のマーカ―と見做し、李敏(2009)では“会”と“要”のみを習慣相のマーカ―と見做している。また、柯も李も指摘しているが、中国語では習慣相を表現するには通常副詞が用いられるため形態論的なカテゴリーから除外されるが、実際に形態論的な形が存在している。柯(2007)では習慣相の形態論的な形が強制的なものではない上、統一的かつ専用のものがないとされている。

日本語において、習慣相という用語が特に用いられず、代わりに反復相(工藤1995、金水2000)や「繰り返し」(吉川1973)などと呼ばれているが、意味的に異なっているところがあるようである。本稿では呼称を統一するため、「習慣相」と呼ぶことにする。日本語では、習慣相はシテイルもスルも表せ、表される内容に特に差がないが(工藤1995)、両者の違いを問うならば「シテイルの方が一時的・偶発的な傾向を表しやすいのに対し、スルがより本質的・恒常的な特性を表すのに適している」(金水2000:42)という点に求められる。つまり、日本語においては習慣相のマーカ―が存在すると言え、シテイルかスルはそれである。それに、両者には特に文法的な違いがなく、話者の捉え方という主観性の違いしか存在しないようである。

今までの研究から見れば、中国語の習慣相に関する研究はかなり少ないため、『現代漢語辞典』や『現代漢語応用辞典』など中国語関係の諸辞典を探しても以上の例文に現れてきた“会”、“要”、“愛”の習慣相の意味への解釈が見つからない。また、日本語においても、習慣相の表現には特に文法的に違いがないため、それに対する研究も少ない。それゆえ、両言語の習慣相に関する対照研究が今のところ一つも見つからない。従って、本稿では対照言語学の面から両言語の習慣相を再び考察し、その同時に両言語の異同についても分析する。ただし、本稿では全般的に両言語の習慣相を考察せず、テンス的な対立の有無と現実性の有無という二つの面だけで考察することとし、ほかの問題について今後の課題とする。

2. 習慣相の定義とその表現

コムリー(1988)では習慣相を「反復的であろうとなかろうと、長い期間にわたって性格的なものとして現れてくる場面」(p.47)と定義し、「習慣性は、原則として、引き伸ばされたり、繰り返されたりする場面を表現するにふさわしい、様々意味論的なアスペクトの価値と結びつくことができる」(p.51)と指摘している。つまり、習慣相はある種のアス

ペクトと見做されている。Bybee(1994)、Thieroff(2000)も同様な意見を持っている。Thieroff(2000)が欧州諸言語を考察した結果、習慣相の文法的な形式を持つ言語が6つしかなく、例えば英語、アイルランド語、チェコ語などはそれである。また、習慣相をさらに「習慣相の過去」と「習慣相の現在」(コムリー1988)に下位分類することができ、例えば英語では習慣相の過去がよく“used to”、“would”によって表現されるが、習慣相の現在を表現するには専用のマーカ―がなく、動詞の現在テンスで表現するのは普通である。

コムリーらは一般言語学の面から習慣相を定義しているが、中国語と日本語の習慣相について次のように説明されている。まず中国語において、柯理思(2007)では過去の習慣も現在の習慣も、いわゆる習慣性の意味を表すには通常、特に専用のマーカ―が必要なく、又は副詞だけで十分表現できるが、何か目的があり、ある効果を達成するために文法的形式が用いられるようになると指摘している。しかし、ほかの言語と異なり、一般的に習慣性の意味を表現する形式はテンス・アスペクトのカテゴリーに属されるが、中国語は習慣相の文法的意味を表す形式である“会”と“要”が「非現実(irrealis)」(柯2007)のカテゴリーに属する典型的な形式であり、「正因为人们标注“惯常”的目的不是着重某个动作的客观次数，而是注意某个人或状态的“特征”，所以陈述动作的惯常性等于是作一种判断(人々が「習慣」を表現する目的はある動作が実行された回数を描き出すのではなく、ある人やある状態の特徴に注目するわけであるため、動作の習慣性を述べること自体は判断を出すことである²)」(柯2007:120)ため、中国語の習慣相はモダリティーのカテゴリーに属する³。

それから、日本語の習慣相について、前述したように工藤(1995)、金水(2000)では「反復相」と呼ばれ、「同型の出来事が反復的に生起することを属性的に表現するのが反復相である」(金水2000:41)と定義されている。この定義から見れば、呼称が異なっているが、同じことを記述しているから本稿では「習慣相」と統一する。日本語では、習慣相の表現形式としてシテイルとスルが挙げられ、本来両形式はアスペクトにおいて対立しているが、習慣相を表現する際に「反復性が動的な意味を捨て、属性的・背景的な意味に踏み込んでいるから」(金水2000:43)アスペクト対立がなくなる。しかし、「完全に超時間的判断の域に達する」場合を除き、習慣相は「一時的な状態であるから」(金水2000:41)テンスの対立がある。金水(2000)の習慣相を「動詞のアスペクト的な性質に依存することはない」

² 日本語訳は筆者による。

³ 柯理思(2007)《汉语里标注惯常动作的形式》,《日本现代汉语语法研究论文选》,北京语言大学出版社。

(p.41) ことからアスペクトのカテゴリーから除外する捉え方と違い、工藤(1995)では「運動の時間的展開(運動自体の内的時間)の捉え方の1つであって、一般アスペクト論の観点からも、アスペクトの意味の1つである」(p.147)と認めている上、日本語の習慣相⁴を「(1)運動の時間的展開の把握の仕方に関するアスペクト的側面、(2)運動の時間的位置づけの仕方に関するテンス的側面、(3)参加者の具体性の有無と連動する時間的限定性の側面、(4)運動のアクチュアル性の有無にかかわる広義ムード的側面、という4つの要素の絡み合い」(p.150)に捉えている。つまり、日本語の習慣相はアスペクト、テンス、モダリティーという三つのカテゴリーが絡み合った文法的意味を持っていると言えよう。

以上の習慣相に対する定義とその表現に関する説明から、中国語も日本語も習慣相の文法的な形式を持つ言語と言え、それに習慣相をモダリティーのカテゴリーに帰することができる点においては共通している。モダリティーのカテゴリーに属せるという特徴は中国語と日本語だけではなく、一般言語学的な面から見ても、コムリー(1976:47)が指摘しているように「偶発的な場面ではなくて、長期にわたる性格的な特徴をなしているのは何か、という問題は、言語の問題というよりは考え方の問題である」。

3. 習慣相のテンス的な対立

前述したように、一般言語学的な角度から見れば、習慣相が更に習慣相の過去と習慣相の現在に下位分類でき、習慣相の過去は過去の長い期間にわたってある動作や状態が性格的なものとして現れてくるのに対し、習慣相の現在はある動作や状態が過去から現在まで性格的なものとして現れ、それに将来も性格的なものとして現れる見通しがあることを指し、つまり過去・現在・未来という全時間帯を包括している。中国語にも習慣相の過去と習慣相の現在があり(柯2007、李2009)、日本語にも習慣相の過去と習慣相の現在がある(工藤1995、金水2000)が、表現形式が異なる。それは、中国語にはテンスという文法的カテゴリーがないためテンスを表すのに副詞や時間名詞などが用いられるが、日本語にはきちんとしたテンスの文法的形式が存在しているからである。李(2009)の述べたように、習慣相の現在が未来も含むことは言及される場面が過去から現在まで頻繁に現れ、それに未来も頻繁に現れるだろうと話し手の予測が含意されるからである。もし言及される習慣が話し手の意志、つまりこれからある動作を頻繁に行うことにする意味を表すのであれば習慣相の未来の存在も可能となる。

⁴ 原著では「反復相」と呼んでいる。

3.1 習慣相の過去の場合

中国語の習慣相が已然の状況を述べるから、前項に時間的フレームがなければ未来というテンス的指向性を持っている“会”と“要”は習慣相の意味にならないが、“爱”は使用されるとき時間的フレームが特に要求されないと柯(2007)によってしてきされているが、ここではまず習慣相の過去の場合における三者の使用状況を見てみる。

(4) 过去，每当我难过了，只要抬头看看爸爸的微笑，心里就会平静下来。 (中日)

[これまで私は、つらくなるたび写真の父の笑顔をながめて慰められてきた。]

(5) 本世纪二十年代以前，每逢元宵灯节，据说庙中都要烧“火判”。 (中日)

[今世紀の二〇年代前まで、「元宵節」の灯籠祭りになると、火神廟では、火神の書記役にあたる「大判」を焼く行事が催される。]

(6) 那时爸爸来到楼门口，总爱叫一声“小曦——”。 (中日)

[父はアパートの玄関に着くといつも「小曦」と妹を呼んだ。]

前節に現れた時間的フレームが「過去」という時間帯を限定しているから、“会”、“要”、“爱”の指す習慣的な動作が過去のある時間帯において頻繁に現れてきたという習慣相の過去の意味となる。ただし、この習慣相の過去は現在という時間を含んでいない。もし、これらの時間的なフレームがなければ次のように過去から現在までの時間帯を含む習慣相の過去となったり、過去・現在・未来を包括する習慣相の現在となったりする。

(4') 每当我难过了，只要抬头看看爸爸的微笑，心里就会平静下来。

(5') 每逢元宵灯节，据说庙中都要烧“火判”。

(6') 爸爸来到楼门口，总爱叫一声“小曦——”。

例文(4')～(6')には「過去」を限定する状況語がないから二つの意味となりうる。一つは現在を含む習慣相の過去である。つまり、“会”、“要”、“爱”を伴った動詞の指す動作「慰められる」、「催される」、「呼ぶ」は過去から現在まで頻繁に現れてきたが、これからはどうなるか言及されない。もう一つは習慣相の現在である。つまり、これらの動作はすでにある規則になり、過去から現在まで頻繁に現れてきただけでなく、これからも頻繁に現れると見込まれる。このような文において、いったい習慣相の過去であるのか習慣相の現在であるのかことは頻度や回数などのような状況語、又は動詞に決められず、文脈から判断しかできない。

例文(4)～(6)の日本語訳から見れば、三つとも過去の習慣的な動作を表しているが、例文(5)では過去テンスの文法的形式のシタが使用されず、非過去テンスの文法的形式ス

ルが使用されている。文に「過去」という時間的なフレームが明示されていれば、習慣相であっても継続相であってもシタ形式が使用されるべきである。これは工藤（1995）で述べられたように「反復性においてもまだ脱時間化されてはいないがゆえに、テンス対立がある」（p.160）からである。しかし、例文（5）のような小説の地の文であれば「非過去形が使用される場合が多く」（工藤 1995:151）、それに「反復性を示す形式がなければ非過去形の使用が義務的である」（工藤 1995:152）から、非過去形の使用が観察されている。もう少し日本語の例を挙げてみよう。

(7) どこの学校でも新入生がそうであるように、私は毎日新鮮な気持で通いながらも、とりとめのない思いがしていた。 （中日）

[我们新生进校也和其它院校的新生一样,虽说每天都会有新鲜发现,但仍觉得一切都摸不着边际。]

(8) 父の存命中は毎月為替で送っていたが、今はそれを為る必要も無いかわり、帰省の当時大分費った為にこの金が大切のものに成っている、かれこれを考えるとそう無暗には費われない。 （中日）

[父亲在世时,每月都要汇钱回去,如今已经没有必要了。可回家时花了一笔钱,所以这些钱还是很可贵的。想到这儿,他觉得绝不能随便乱花。]

(9) どうも変だ、己れは小供の時から、よく夢を見る癖があつて、夢中に跳ね起きて、わからぬ寐言を云って、人に笑われた事がよくある。 （中日）

[我小时候常爱作梦,梦里突然跳起来,说莫明其妙的梦话,经常被人笑话。]

例文（7）では「過去」を限定する状況語がないが、作者が学生時代のことを回想する内容であるから文脈によって「過去」という時間帯が提示されていると言える。例文（8）と（9）では「父の存命中」、「子供の時」という「過去」が明示されているから、シタ形式の使用が求められる。それらの中国語訳からも分かるように、過去という時間的なフレームが設定されているから、現在という時間帯を含まない習慣相の過去となる。この点において両言語に共通なところが見られる。

3.2 習慣相の現在の場合

前述したように、習慣相の現在は過去のある期間に実際に起こった動作の繰り返しが存在に続いてきており、更に未来へと続いていく見通しがあることを含意する。そのため、前節に「過去」という時間的なフレームが設定されてはいけない。ただし、習慣相の意味の成立に必要な条件である頻度や回数などの状況語の使用は依然として要求される。

(10) 每次“装车”、“卸车”的演出结束以后，过不了几个小时，附近一些单位架设的高音喇叭里，便会传来电台广播员那圆润洪亮的宣布名单的声音… (中日)

[この一幕のあった数時間のちには、附近のどこかに取り付けられたスピーカーから、ラジオのアナウンサーのさわやかな声流れてくる。]

(11) 猫弟弟仿佛懂得妹妹的心，它每天都会变出新的花样来逗我发笑。 (中日)

[妹が連れて来た子猫は、毎日様々な趣向で私を楽しませた。]

(12) 每个星期，她都会收到不能公开的来信；每个周末，她都有神秘的约会。 (中日)

[每週他人には見せられない手紙がやってきて、土曜日には必ずデートがあった。]

例文(10)～(12)では指し示された繰り返した場面“传来声音/声が流れてくる”、“变出新的花样/様々な趣向で私を楽しませる”、“收到来信/手紙がやってくる”は過去から現在まで続いてきただけでなく未来へと続いていく見通しがある場面である。しかし、それらの日本語訳では違うことが観察される。例文(10)ではスル形式が使用され、それらの中国語文と同じように習慣相の現在の意味であるが、例文(11)と(12)ではシタ形式が使用されているから習慣相の過去の意味となる。つまり、中国語においてテンスの文法的カテゴリーが存在しないため時間表現がなければテンスの判断は曖昧になるが、日本語においてテンスの文法的マーカがあるから時間表現がなくてもシタ形式が用いられるかそれともスル形式が用いられるかによってはっきりとテンスが示される。そのため、テンスの問題になると両言語には不一致がよく現れてくる。

また、日本語の習慣相の現在の例文をもう少し分析してみよう。

(13) 私はこの話を思う度に戦慄する。 (中日)

[每当我想到这些时，就会不寒而栗。]

(14) やはり都心でないと不便です。三人が每晚のように集まるんですから。 (中日)

[不是市中心毕竟不便，三个人每晚都要聚会嘛！]

(15) たとえば、アメリカ人のよく使うアグレッシブな、また、一見、私たちには横柄に見える応対というものは、日本では特殊な場合にしか使われない。 (中日)

[例如，美国人总爱使用咄咄逼人的、在日本人看来近于蛮横的讲话方式，这种方式在日本只能用于特殊情况。]

スル形式は非過去形の文法的マーカとして使われているが、例文(13)～(15)のようにその前に頻度や回数などの状況語があれば「過去のある期間に実際起こった動作の繰り返しと、未来において引き続き起こると見通されるその動作の繰り返しとをつなぎ合わせ、動作の繰り返しの架空の継続性とそれに基づく架空の現在を作り出している」(須田

2010:106) といういわゆる習慣相の現在となる。この習慣相の現在は中国語の習慣相の現在と意味的にも形式的⁵にも一致していると言えよう。

3.3 習慣相の未来の場合

柯 (2007) では已然の出来事でなければ通常習慣性を持たないから、前節には已然と限定する時間的なフレームがなければ“会”と“要”は習慣相の意味とならないとしている。しかし、以下の例文で観察できるように、未然の場面においても前節が頻度を表すものであれば“会”と“要”は習慣相が表せる。

- (16) 燕宁哽咽着劝我：“方丹，别难过了，以后我们每天放学都会来看你的。” (中日)
[燕寧はベッドのはしにすわって、つかえつかえ私を励ました。「方丹、つらく思わないで。これから毎日、学校の帰りに会いに来るから」]

- (17) 当时的广东省省长叶选平在察看北江大堤后，郑重宣布：今后，我们每年都要来北江大堤“上一课”。 (CCL)

[当時の広東省長である葉選平さんは北江堤防を視察したとき、「これから我々は毎年北江堤防へ勉強に来る」と言った。]

“会”と“要”には元々未来テンスの指向性があるから、未然の出来事に使用されるのは当然であるが、柯 (2007) によれば已然の出来事しか習慣性を持たないため、“会”と“要”は未然の場面において習慣相の意味とならない。しかし、例文 (16) と (17) のように未然の出来事であるにもかかわらず話し手の決心や予定を表現する場合であれば使用される。それは、未発生の出来事は通常習慣にならないが、話し手自身がある動作をこれから繰り返させることにするのであれば未発生の動作であっても習慣性を持ち得るからである。このような習慣性の未来の文は成立する場合は限られるから習慣相の過去と習慣相の現在の文よりかなり少ないが、その存在を無視することはできない。

中国語と同様に、日本語では習慣相は一般的に過去・現在のみであるが、一定の条件に満たせば未来でも表せる。

- (18) 「できるだけ頻繁に会いにくるわ」 (工藤 1995:157)

[我会尽量常来看你的。]

- (19) 「明日からひどいぞ。毎日出かける」 (工藤 1995:157)

[明天开始就要辛苦了，每天都要出门。]

⁵ ここでいう「形式的」はマークされない中国語の場合を除く。

(20) 癌で多くの人が死んでいるだろう。

筆者が検索した結果、習慣相の未来を表す文はかなり少なく、例文(18)と(19)のように話し手の決心や予定などを表す場合や、例文(20)のようにある時点までの話し手が言表事態への予測の場合などに限られる。工藤では習慣相においてスルーシテイルの対立が中和すると指摘されているが、例文(20)のような場合には動詞のシテイル形式が用いられる。それは未来における結果継続の反復になるからである。つまり、反復相においてスルーシテイルの対立が中和するが、動作継続の反復と結果継続の反復を表す場合であればシテイルの使用が義務的である(工藤 1995)。それは過去・現在に限らず、未来もそうである。

4. 習慣相の現実性と非現実性

「習慣性」はといった現実的であるのか、それとも非現実的であるのかという問題について、今までの研究から見れば言語によって異なる結果となるようである。例えば、中国語では習慣相は非現実的のカテゴリーである(柯 2007) 観点もあり、現実的のカテゴリーの特徴とも非現実的のカテゴリーの特徴ともあるという観点(李 2009)もある。それに対し、日本語の習慣相における現実性の問題については殆ど異なる見解が見当たらず、基本的に習慣相の過去であれば現実的であるが習慣相の現在や未来であれば非現実的であると思われる。ここでは中国語と日本語との習慣相の現実性について検討してみる。

4.1 習慣相の過去の場合

柯(2007)では習慣相の現実性問題について次のように述べている。

HABITUAL 之所以能属于非现实范畴，是因为我们用[命题 P+惯常标记]的时候，并没有陈述命题 P 在特定的时间和空间发生过，我们只不过基于 P 所发生的高频性，从而对某一人或物的特征做出某种判断而已。

现代汉语(普通话)里标注动作的惯常性的三个能进入能愿动词的句法槽的形式均属于非现实范畴。

p.119

それに対し、李(2009)では違う意見を持ち、次のように述べている。

说话人说出口头所表达的行为或事情时，基本上还是把它当作事实来陈述的，但是缺乏某种实在性。所以综合来看，习惯体的范畴化程度确实不高，这也是为什么柯理思把汉语的习惯体称作“半范畴”的原因：它带有一些现实范畴的特点，又带有一些非现实范畴的特点……我们可以把它看成是现实和认识情态的杂交体。

pp.74-75

すでに考察したように、習慣相の過去の場合において前節に「過去」という時間的なフレームが現れたら「現在」を含まない習慣相の過去となるが、なければ「現在」をも含む習慣相の過去となる。どちらであっても習慣相の過去は言及された頻繁に現れた出来事や場面が発話時点においてすでに実現した場面であるから現実性を持っていると考えられる。中国語ではテンスの文法的カテゴリーがないため文法的形式によってその違いが表現できないが、日本語には習慣相の過去に通常「完成」というアスペクト的意味をも持つシタ形式が用いられるため現実性を裏付けている。

(21) 过去有些同志认为革命战争已经忙不了，哪里还有闲工夫去做经济建设工作，因此见到谁谈经济建设，就要骂为“右倾”。（中日）

[これまで、一部の同志は、革命戦争だけでもいそがしくてやりきれないのに、経済建設活動をやるひまなどどこにあるかと考え、そのため経済建設の話でも耳にしようものなら、すぐに「右翼的偏向だ」ときめつけた。]

例文(21)のように、前節では“過去/これまで”という時間的なフレームが設定されているから、“罵为“右傾”/「右翼的偏向だ」ときめつけた”という繰り返して現れていた出来事は実現された場面であると同時に発話時点においても観察できない。習慣相のマーカ―“要”が用いられたから話し手の判断の意味が持ち出されるにもかかわらず、過去のことであるから現実性は依然として存在する。

4.2 習慣相の現在の場合

習慣相の現在において過去のある期間に実際に起こった動作の繰り返しが現在に続いてきており、更に未来へと続いていく見通しがあることを含意するから、現実性と可能性とが絡み合っているといえる。

(22) 私たちは毎日専門医をまじえてセッションをしています。（中日）

[我们每天都同专科医生碰头。]

(23) 澹台智珠家的“鸟巢挂钟”大概是从信托行买回来的，每当报时的当口，一只布谷鸟便会转出木雕葡萄叶遮掩着的鸟巢，出来鸣叫。（中日）

[澹台お婆さんの家のは「鳥の巣」の掛け時計だ。おそらく信託商店で買ってきた中古品だろう。時間になると木彫りの葡萄の葉かげの巣からカッコ鳥が出てきて鳴く。]

工藤(1995)では習慣相の現在において「今後も実現=顕在化の可能性はある」(p.149)から習慣相の過去より非現実的であるとしていることから、習慣相の現在には現実性とも非現実性ともあると言えよう。例えば、例文(22)ではシテイル形式の使用により「セッ

ションをする」という動作が発話時点より前に始まったが、発話時点より後へと続いていく可能性が見込まれる意味となる。中国語の場合も同様であり、例文(23)のように“布谷鳥出来鸣叫/カッコ鳥が出てきて鳴く”という動作がこれからも頻繁に実行されると推測できるから現実性と非現実性とが絡み合っている。

4.3 習慣相の未来の場合

前節で考察したように中国語の習慣相の未来と日本語の習慣相の未来においては意味上と形式上に不一致なところが多いが、未然のことであるから非現実的であると言える。例えば例文(16)～(20)で観察できるように何れも非現実性が伴われる。

5. 終わりに

本稿では中国語の習慣相マーカーとされている“会”、“要”、“爱”をメインに中国語の習慣相と日本語の習慣相についてテンス的な対立の有無、現実性の有無の面から考察を試みた。その結果として次のことが明らかになった。

まず、中国語において習慣相の文に文法的な形式の使用は強制的ではないが、日本語では強制的である。しかし、両言語においても文法的な形式の使用の有無を問わず、前節に頻度や回数や反復などを表す状況語の生起が義務的である。

続いて、中国語においても日本語においても習慣相を習慣相の過去、習慣相の現在、習慣相の未来に分けることができる。習慣相の過去の場合、前節に「過去」という時間的なフレームが設定されていなければ過去と現在との時間帯を含んでいるが、設定されていれば過去という時間帯だけを含むようになる。習慣相の現在の場合、過去のある期間に実際に起こった動作の繰り返しが現在に続いてきており、更に未来へと続いていく見通しがあることを含意するから過去・現在・未来の全時間帯を含むと言える。この点において両言語は共通していると言える。しかし、習慣相の未来の場合では中国語において話し手の決心や予定を表す時にだけ使用されうるが、日本語は中国語とほとんど同様であり、更に話し手が言表事態への予測を表すときにも用いられる。

最後に、習慣相は一種の判断であるから非現実的なカテゴリーであるとされているが、やはりテンスの違いによって現実的になったり非現実的になったりする。一般的に、習慣相の過去はすでに実現した出来事や場面を述べているので現実的であると思われるが、習慣相の現在は未来に対する予測が含まれるので現実性と非現実性が絡み合っている。それに対し、習慣相の未来は完全な見通しであると言えるため非現実的である。

本稿では文法的な形式が使用される場合の（＝有標的な）中国語の習慣相について考察したが、残念なことにそれらの文法的形式における意味的相違や使用上の違いについて触れていない。この問題をこれからの課題としたい。

例文出典

(中日) 『中日対訳コーパス』北京日本学研究中心2003

(CCL) 『CCL コーパス』北京大学中国語音学研究センター2009

本文で使われている例文の中、『中日対訳コーパス』から引用した例文とその訳文は全てコーパスのものであるが、『CCLコーパス』から引用した例文の訳文は筆者の訳である。また、出処が明示されていない例文は筆者の作例である。

参考文献

金水敏・工藤真由美・沼田喜子 2000 『時・否定と取り立て』岩波書店

工藤真由美 1995 『アスペクト・テンス体系とテキスト——現代日本語の時間の表現』ひつじ書房

須田義治 2010 『現代日本語のアスペクト論』ひつじ書房

バーナード・コムリー 1976、1988 『アスペクト』(山田小枝訳)むぎ書房

柯理思 2007 《汉语里标注惯常动作的形式》《日本现代汉语语法研究论文选》北京语言大学出版社

李敏 2009 《现代汉语习惯体分析》《宁波大学学报（人文科学版）》22

吕淑湘 1980 《现代汉语八百词增订本》商务印书馆

Bybee, Joan, R.Perkins & W. Pagliuca (1994) *The Evolution of Grammar: Tense, Aspect, and Modality in the Languages of the World*, University of Chicago Press.

Thieroff, Rolf (2000) *On the Areal Distribution of Tense-aspect Categories in Europe*, in Östen Dahl (ed.): *Tense and Aspect in the Languages of Europe. Empirical Approaches to Language Typology*, EURO TYP 20–6. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.

(りゅうちえんちえん/杭州師範大学)